

余慶編

山口重遠著

藤井讓治校訂

(表紙)
「余慶編」

余慶篇

(朱文方印)「山口平」
(朱文方印)「菜稿」
(朱文方印)「藏書」

凡例

- 一 余慶編は、小浜藩士山口庄右衛門安固(号・春水)の一代記であり、安固の子重遠が天明八年(一七八八)に著述したものである。本文は斐紙に楷書で記されている。完成後、二度あるいは三度にわたって補筆・訂正が墨書あるいは朱書でなされている。
- 一 本書は、小浜市立図書館酒井家文庫所蔵にかかる。
- 一 文字は、通用の文字に改めた。
- 一 校訂に当たって、本文中に読点、並列点を加えた。
- 一 原本の破損・虫損等により読めない文字は、□で示した。
- 一 原本の抹消・訂正がある場合には、その文字の左傍に「こ」を付し、訂正や追筆の文字があるときには右傍にその文字を記した。もとの字が判読できないものは▣をもつて示した。
- 一 補筆・訂正のうち朱書にはその文字頭に「*」を付した。
- 一 校訂者の注記は、()で示した。
- 一 本書の伝来や従来の研究については、本紀要収載の拙稿「山口庄右衛門安固と小浜藩中期の藩政」を参照されたい。

騎馬役ニシテ馬ナキハ猶舟ノ艦ナキガ如シ、余若年ヨリ志アリツレドモ数十年前未^レ達、忠貫公御^(酒井)初入ノ時馬持ハ遠敷村へ出ル先例ナリ、知行ノ高モ二百石馬持ノ格ナレトモ、御用捨トハ云ナガラ口惜クオモヒシナリ、コレヨリサキ忠用公ノ御跡御城代松平右京大夫様御家^(酒井)中ノ云ヒ分シニ、讚岐様衆ハ持馬ハ(ハ抹消「ヲ」)何方ニアトメヲカレタルヤ、既ノアトスクナシトノ評判ヲ慥ニキ、タリ、晋ニ徹リ口惜^ク心外云ハカリナシ、人ハトモアレ馬持ノ高ナレハゼヒトオモヘハ持タルベキ事ト思ヒツケル事久シ、又ハカラズ食禄一倍ヲ加ハラレ、江戸住居ノ時ハ役ガラト云ヒ、高知ト云ヒ、コ、デコソト力ミタレドモ^(四百石)口ノ御年限中人ヲ養事ナリカナル折節、土井大炊頭様七万石ニテ江戸家中ニ持馬十八疋トキク、御時節トハ云ナガラ心外至極ニ思ヨリ、小野打父子ニハカリ其費用ヲハカハリ見ルニ、大底一月金一片ニチカク一年十金余ナクテハ瘦馬ヲ繫ク事モナリガタキヤフスナレハ、トテモ力ニ不^レ及押^レ移リ、御年限明キタル時ハ隱居シテ小浜ニカヘル、生涯此志願ハトゲザリケリト本意ナク思^フ心底ヲ重^(山口)遂ハ知りテ、代ハカハレドモ志ヲ遂シメタキ所存ナレドモ、彼カ母長病不幸、小浜へ引

越、屋敷モ大破ナンド、云フサシムキノ時勢、手モ不_レ及心外ニ
 押_レ移リ、重_レ遂モ亦早_レ世ス、*丹三郎重_レ迪ガ代ニウツリテハ食_レ禄モ減シ不
 幸後ノ費用_モ不_レ少父_レ兄ノ志ヲツガントネガヘトモ未_レ果、老年ノ心
(山口)
 ニハ行_レ先モ近ク、衰_レ耗モ強ケレバ、迪モ此志願ハ遂ケガタキ事ナ
 ラント思ウチニモ、猶念_レ慮ニハタヘザリキ、今年天明八六月ニイ
 タリ、重_レ迪云、隱_レ居料ニ玉ル俸_レ米手段ヲ立テ、今_レ月ヨリ大半他
 ニ費スニオヨバヌ手_レ宛ニナリタリ老_レ齡ノ養ヒイカ様ニモ心次_レ第二
 スベシト云、ソレコソ余_子多_子年ノ願_レ望ト云、老_レ後ノ樂ト云ヒ、馬ヲ
 持ニ若ク事ナシ、汝ガ家_モ禄モ同僚ノ中ニテハナラフ者ナキ事ナレバ、
 責テ馬ナリトモ繫クナラバ、汝ガ御奉_レ公ノ寸_分ニモナルベシト父子
 相議ル折_レ節ニ、不_レ思_レ儀ノ端出_レ来リ、稽_レ古修_レ行ノ為ナラバ少_レ々
 ノ御_レ米ハ下サルベシ、御金モ貸サルベシトノオモムキナリ、少_分ニ
 テモ 御_レ上ヨリ御手_レ宛下サルレバ直キニ馬ヲ持テガシノ 思_レ召モ
 ハカリ知ラル、一_レ己ノ榮_耀ニ持ニモアラズ、実ニ寸_分ノ志モ遂ゲ、
 且老生従_レ来ノ所願モ達ス事_ニ有_レ湊_レ合_レト云諺ノ如シト、父子手ヲ
 拍テ欣_レ喜ニタヘズ 上_レへ達スレハ則米ト金トヲ出シ下サル、其折_レ節、
 江州彦_根へ便_レ宜有リテ鹿毛馬ヲ牽入ル、父子唯夢ノ如ナリ、大_底
*五
 四_十年_一来ノ本_意コ、ニオイテ事ナリタリ、明日死ストモ怨ナシ、
 情_昔今ノ事ヲオモフニ、先_考マデトハチカヒテ第_宅如_レ此_レ広ク、庭
 園如_レ此_レ大_ニ衣_レ食_レ如_レ此_レ足リ、親_族如_レ此_レ和_シ、書ヲ讀ミ碁ヲ圍ミ、
 世_喧ニ遠ザカリ山_水ヲ樂ミ、何ニ一ツノ不足モナシ、深_艸ノ玄_一栖

ガ事_{タラヌ}たらぬ身_{トハオモ}とハおもはずト云ヒタルトハ事カハリ、事_々物_々カク
ココココ
 ル事ナシ、況ヤ今日多_年ノ願_レ馬ヲマデ牽_レ入_レレモハヤ思ヒノコス事
 ナシ、サルニテモ此世間ニイカナル天ノ賜モノナルヤ、コレヲ身ニ
 顧_レハ徳モナク、オモナク、功モナク勞_レモナシ、然シテ御家中誰カ其右ニ出
 ル仕_合セ人ノアルベキヤ、僥_倖ト云ヒ耳タブト云ヘドモ、*事アレトモオノズカ
 ラ其ノ然ルユヘンナキ事ナシ、抑_レ此_レ身ニオイテイカナルユヘント云
 事ヲシラス、近ク御奉_レ公ノ始_末ヲ点_檢スルニ一ツトシテ御用ニ立チ
 タル覺モナク、一ツトシテ御_レ為ニナリタル事モナシ、然シテ格_レ禄人
 ノ上ニ立チ、恩遇殊ニアツシ且シカノミナラズ隱居シテ俸_レ米過_分ニ頂_戴シ、安_レ樂モ
 亦タグヒナシ上_ハ、先考国_君無_類ノ大_恩ニ背キ、中_ハ父_師懇_惻ノ
 遺訓ニ戻リ、下_一己ノ素_志所願ニタガイ罪_責不_レ少シテ 恩_幸
*窃謂
 ノ他ニ過ル事、マコトニ怪ムベシ、潜ニオモフ、易曰、積_レ善之家有_二
 余_慶、重_政翁以_レ来ノ篤_実、近クハ先_考安_固翁心ヲ国_事ニ苦シメ、
 織_毫身ヲ顧ル事ナク 君ヲ愛スルノ誠_心、死_而後_休矣、其余_慶子
 孫ニ及ビ此樂ミヲウクルナルベシ、上_国恩_ハ云ニオヨバズ、祖先
 ノ積善モアリガタキ事ナリト思ヨリ、安_固翁幼_年ヨリノ行_状聞_及ビ
 見_及ヒタル端_末ヲ書キツツケ、余慶篇ト題ス、稚子孫 国家ノ大_恩
 ヲ不_レ忘、祖_先ノ辛_勞ヲオロソカニセザランコトヲネカフ耳、

梅_街嘗_画二_地上_二日
鬼頭
 幼_年刺_客報_レ辱_レ魂

西津口御門通り梅小路西側北ノ角屋敷今三宅重政翁二賜り重、
 晴翁マデコ、二住、先考此家二生ル、稚名団次郎、甫メ六七歳
 門前ノ地上ニ鬼ノ頭マナドヲ画ク、往來ノ人心ナク其付上ヲ踏ム寸ハ
 士ノ画ヲフム事ヤアルトテ、杖ヲ以テウタントス、其人謝スレバ休
 ム、○其比高橋作左衛門有無允ハ翠巖翁ノ友也、タマタマ翁ト対
 話ス、先考ノ母ハ河野氏ナリ、先考ノ幼ヲ愛スルノアマリ、白粉
 ヲ顔ニヒキ、儔フテ翁ノ前へ出テ、三浦氏三浦氏ハ重政翁召へ往クヲ告ク出ダサレノトキノ肝
也、作左衛門戯フテ団二郎ハイツ女子ニナラレテルヤ、顔ニ白粉ヲ
 ヌリテトナブル、先考甚憤リ、志突殺サントスルニアリ、ネライ
 ヨリテ作左衛門腰ナル脇指ノ柄ニ諸手ヲカケ中バヌク、作左衛門オ
 サヘテヌカセズ、歎タテ云、此兒ノ氣サキ頼モシ、次治兵カナラズ呵
 ルマイゾ、サテサテアヤマリ入りタリト謝シテ休ム、
 此コロノ事ナルベシ、重通翁居合又ハ記録ノ会アリ、先考幼
 年ナレドモ古戦ナドヤ、文義通ズ、折節其会ノ中へ出テアラムキ
 二横タハリ、寝臥テ記録ヲキク事タビタビナリ、重通翁ノ友、此
 児ハ文義通ズルト云テ不審ス、又夫ヲケシカケ咬合ス事ヲ好ム、
 添田氏健狗ニツヨキ犬アリネズト名ツクマイドツレ来リテ勝シム、モシ危キ寸
 ハ相手犬ノ四足ノ中へ杖ヲイレテコゼマワシ、或二疋ノ中へワ
 ツテイリツイニ勝シメザル事ナシ、幼年ノ元氣大底是ニ類ス、
 西郵ノ血涙堪ヘ知恥ヲ、
 無窮ノ精神骨裡ニ根サス

翠巖翁普請奉行ヨリ高浜ノ町奉行ニ転ズ、先考從之、時二十二歳、
 和田ノ御茶屋ニアリ、小栗七右衛門・七三郎小浜ノ町人ナリ、二人共小栗
浜ニ縁アリ、七右衛門ハ大黒屋肥後ナ、一、日來リ訪フ、兄、弟文才アリ、翠
子今ノ七右衛門、鶴羽小路二家ス、
 巖翁史記左伝ヲ講ゼシメ、其オヲ好シ、且曰、団次郎モ太平記
 ヲ持來テヨムベシトナリ、先考時十二三歳謂ラク、彼レ町人ニ
 テ史記左伝ナドヲ講ス、予何ノ面目アリテカナ本ノ太平記ヲヨマン
 ヤト、心中甚不平ナリ、固ク辞シテ不肯読、翁シヒテ読シム、
 先考不レ得辞口惜サノアマリ泣々太平記ヲ讀ム、心中謂ラク、彼
 レ我二年長シテ今日カクノゴトシ、我数年二天下ノ博識トナリ、
 学七右衛門等ガ上ニ出テ、今日ノ恥辱ラス、ガント、骨髓ニ入テ
 所存ヲ立ツ、知恥ト云ベシ*所謂、翠巖翁又太平記ノ内ヲアゲテ衛
中ノコトニオイテ
 威公ガ載レ鶴ヲ恨ミ、秦李ニ斯ガ牽レ犬ヲ哀ミ、ナンノ事ナルヤト問、七右
 衛門史記ニアリトテ其事実ヲ対フ、マスマス其強記博識ナルヲ感
 称シ、先考二向テ、汝成人セバ史記ヲヨムベシトナリ、先考イヨ
 イヨ憤リ志ヲ立ル事マス、固シ、後年雜話ニ七右衛門等ハ予ガ善
 知識ナリ、彼ニ激スルガユヘニ学ニ就キタリ、其時ノ口惜サオモヘ
 バ猶大息スルニ堪タリト、御雜談ナリ、
 此コロ重通翁ヤフ、病源ラムスビシニヤ、河野氏ノ辛勞言ニ
 ノバガタシト、毎々御話アリ、略ス、
 自是昏旦不舎卷、
 角鹿就レ学ニ伊生ガ門

先考此後日、夜読書ヲ事トス、志七右衛門ガ上ニ出テ、前日ノ辱ラス、ガント思ニアリ、○翠巖翁転シテ角鹿ノ奉行トナル、先考従フ時二年十四、角鹿ノ町ニ伊藤黙庵者アリ、伊藤藤仁齋ガ門人ナリ、先考其博識ナルヲキ、就テ学ヲウケ、日夜困苦ス、千群ノ遊戯眼不転セ、

三反ノ讀史通黄昏

黙庵ガ宅市中ニアリ、秋七月兒女子ノルイ多ク集リ粧ヒカザリテ町内エ輪廻シオドリ遊ブ、三弦太鼓音頭アリテ甚ニギヤカナリ、先考伊藤方方へ通フノ道、オドリアレドモ眼ヲ転ゼス、真中ヲスグニ通り、純ニ其道ヲ求ム、黙庵愛シテ心ヲツクシテ教導セシト見ユ、佳墨ナドサシアゲシ事アリ、○角鹿ニテ翠巖翁ノ令ニマカセ史記ヲ讀ドモヨメズ、朝ヨリ暮ニイタリ、半夜ニイタル、薄暮文字見ヘガタキ寸ハ、庭ニ出テヨム、ヨメザルモノヲムリニ読事三反ニ及ビ、シダイニ文義通ジ、衛世家李斯伝ニイタル、翠巖翁欣喜ニタヘズ、此コロ拵ヘラレシ書架二箱今存ス、

友愛所分阿兄難

密寮欲推 国儒論

先考仲兄浜名兼克翁部屋住ニテ江府ニ詰ム、帰国ニ及デ金子ソコバク粉失ノ事アリ、此事アリノマ、ニテハ養父幽栖ノ手マヘ疑レンヲ畏ル、イカントモスベヤウナシトノ書状、角鹿先考ノモトニ達ス、先考年十五六〇、出入ノ商家天屋五郎右衛門ヲ招キ、ヨ

ギナキ事ニテ金子ソコバク十兩バカリノ事ナ入用ノ事アリ、ネガハクハ引カヘ出スベシトナリ、天屋肯テ即時ニ弁ズ、其事ワケハ不レ知ラドモ、蓋先考ノ顔色不尋常ヨリ事躰コソアラメト肯フタルナリ〇、市野工出迎テ兼克翁工致ス、兼克翁終身此事ヲ贊称ス、小浜ニアリ、朱学也

○小浜ニ田中源之進・松田善二郎儒官ニテ、先考ハ黙庵ガ門ニ遊デ仁齋ガ学流ナリ、仁齋モト朱学ナリシガ終ニ一家ノ学ヲ唱フ、仁齋京堀川学ト称ス

二住ス、故二世、先考朱学ニ不審多シ、小浜ヘ出テ田中・松田ト極論スベシト添田氏ノ家ニ寓居シ、田中・松田ニ通シテ日ヲ定メ、其日ヲ待ツ、二生晩景マデ入来ラズ、或人田中・松田ニ異見シテ云、

山口ハ年若ノ壯士ナリ、極論スルニ及デナカク容易ノ事ナルマジ、少年ヲ相手ニシテ弁シツメテモ長ナ氣ナシ、シカ□ヤメラレ

ヨトナリ、松田尤ニ思タルカ薄暮従容トシテ入り来テ云、学流

ノ違ヒタル各宗トスル処アリ、今コレヲ極論ストモ彼此益ナカル

ベシ、他日ヲ期スト〇云ヒ置キ、ツイニ不レ会セ、此二事義理ノ当

否ハ不レ論、弱年ノ氣概見ルベシ、其大底コレニ類ス、

先考不レ通ノ大食此コロナリ、ツイニ脾胃ヲ損ナヒ大病八九分

ノ腫氣ナリ、目ヲヒラク事モナリガタキ位ナリ、医師密ニ看病、

人ヘ対シテ急変モハカリガタシト云、先考此言ヲキ、此医生モ

トルニタラズ、予何シニ死スベキヤ、ウツケタル事ヲ云モノカナト

思ヒシトノ事ナリ、不日ニ小便多ク通ジテ、癒ユ、

看破古義浮末ノ説、

沛然伊洛本実ノ言

二

二

先考此、後角鹿ニカヘリマス、書ヲ讀ム、尋デ仁齋ガ常ニ論孟古、義ヲ以テ門人ヲ教ヘ、其学ノ烏乱ナル事ヲ覺トナリ、慨然トシテ道ヲ求ル志アリ、コレヨリ程朱本実ノ学ニ入ル、

臥雲雨晴分三路徑、
望楠日照得二測源一

翠巖翁老年隱居ヲ命ゼラレ、先考家督ヲ継デ小浜ニ帰ル、年二十、西津田縁チニテ屋敷拜領今河村伊兵衛屋敷、此長屋ニ亭アリ、臥雲亭ト号ケ、コ、ニオイテ学ヲ講ジ、田中十蔵ナド、書生ヲ訓ユ、程朱ノ説ニヨリテ、ヤ、問学ノ路逕明ナリ、此コロハ外ニ儒官トテモナク、善三郎・源之進ナドモ幾ホドナク下世シ、少年多クハ先考ノ方ヘ集リテ讀書シ、講書習字ヲ討論ナドモアリ、○享保三年為加番京師ニイタル、近藤玄悦京都ノ案内ナルニヨリ、経学ノ師トタヌムベキ有名ノ人ヲ問フ、玄悦三宅・若林ノ両先生ヲ指ス、先考兩先生ニ見ヘテ強齋先生ノ拔群ナルヲ以テ、伏テ其道ヲ求メ、篤ク其教ヲ信ズ、先生亦其才器ヲ愛シ、心ヲツクシテ教導アリ、今マデ程朱ノ学トハイヘドモ、シカト根本正キ師ニツキテノ学ニモアラス、仁齋ガ学ノ卑猥窄狭ナルヲシリ、ヤフク四書・近思録ナドニヨリテ程朱ノ学ノ本実ナルニ志ヲ立ラレタルマデ。事ナリシガ、強齋先生ノ門ニ入テ初テ雲霧ヲ開キテ天日ニアヘルゴトク、其測源ヲ得ラレタル事格別ナリ、

三綱八目亘古今、

達道達德徹乾坤

強齋先生ニ初テ見ヘ、先生大学ヲ講ジキカサレ、從テ教授モアリタルヨリ、段々格別ニ力ヲ得、カサネテ上京ノトキ中庸ノ解ヲ説クネガフテ、三十三章オハル、ココニオイテ道学初テ明ニ朱子伝来ノ正脈ヲツギ、経義判然ウタカフ処ナシ、

一言訣重父師德、

万訓不漏天地恩

先考京加番ノ時、江州舟木材木座ノ事ニテ公儀カケ合ノ事アリ、雑話続録ニ詳也、此時義理ノ当否取舍ノ輕重、先生ノ所存ヲ扣カレタル事アリ、其終リ先生声ヲハゲマシテ曰、莊右衛門覚悟ハヨキカトナリ、此一言先考ノ心根ニ徹シ、前後ノ処置カケアイノ次第マデ他日遺憾アル事ナシ、賢者ノ一言不尋常モノナリト、後年シバク歎息感慨アリ、信敬セラル、事見ルベシ、○先考強齋ヲ仰ク事天地神明ノゴトシ、三度ノ上京応接ノ際、一言ノ雑話トイヘドモ等閑ニ聞スゴサズ、中ニ骨立タル事ノ分ハ書記シテ先生ニ質問ス、経伝講説口授神道ノ相伝口訣ノ類ヒ、其余先生著述雑記オヨビ雑話筆記・同続録ノ類ヒ、家ニ蔵ム、爾来雲物定紛冗、海上光景有三元原、先考上京ノマヘ已ニ程朱ノ説ヲ信ジ、其道ヲ講説ストイヘドモ、シカト師範ト云モナシ、初メ強齋ニ相見ノトキ、是マデ学フ処善師

ニツカザルユヘト見ヘテ、問学統紀ナシト先生モ言レシナリ、然ルニマヘニモ云通り、先生考先ニ就テ山崎・浅見両先生ノ定説ヲウケ初テ伝ヘ、程朱ノ本意ヲ得、コレヨリ小野・西・依ノ二老吹拳ノ端シモヒラケ、明和八年ノ大変革 忠貫公此学ニヨリテオヲ挙ゲ、風俗ヲ和シ、進脩ヲ純ラニシ根、本ヲ固シ、御当家中興ノ大事業ヲ成サセラレ、天下御美德ヲ伝ヘ称スルモ、全ク強齋先生ノ道ニアリテ、其緒ハ先考ヨリオコレリ、今マテ慥カナラザリシ道義悉ク定リ、若雲浜耶城上オノズカラ仁義ノ道ニヨリトコロアリテ、賢モ不賢モ知モ不知モコ、ガ基本トナリテ、光明景色何トナク全体ニテ革マル所アリ、観物寮已三津辺、

晋雨伐 邑滋 賀前

先考自脩ノ処ヲオモフニ、忠音公大坂ノ寸、諸生ト共ニ学ヲ講ジ、西瓜ノ少クテ赤ク、歌舞伎役者ノ菩提心ノコト雑話統録ニ出キ、実ニ観物寮已ト云ベシ、*三津辺ハ大坂ニテノ事ナレバ三津辺ナリ、○京加

番ヨリ表取次ニ転シ、大坂勤番ノトキ強齋先生ヲ大津八町ノ旅宿ニ請ジテ、同書生男若輩学子姪ノ中ニオイテ先生ヘ対シ、旧悪先非ヲツラネ云テ聊モ蔵シ包ム事ナク独知ノ場ヲ潔シ、神明ニ愧ザル治ノ功夫晋筆古のおよふ処にあらず書志学の勇敢雨伐邑ト云ベシ、滋賀前ハ大津ニテノ事ナレバナリ、

此前後強齋先生往復ノ事ハ、雑話筆記・同統録ニ詳ナルユヘスベテ略ス、此二本ノ事ヲ土佐侯ノ儒官箕浦右源次伝ヘ聞テ懇望ス、強齋ヲ信ズル同レハ学ナルユヘ示レ之、右源次模写シテ秘蔵ス、

土佐ニ帰リテ其同僚ニ云、生タ賢者ノ交リハ此二書ナリト、同志懇望スレドモ不示、強ヒテ求ル者アレバ見拜○ヲユルストイヘドモ、門ヲ不出サ、我家ヘ通ヒテ請ヘバ拜見セシム、其信敬ミルベシ、○スヘテ先考道学自脩ノ事件多シ、或節儉、或清白、或忠誠、或慈愛、或懇惻、或明弁、或寛裕、或嚴励、或篤実、或果敢コトクク事實アレトモ枚挙スル事アタワズ略ス、此一ニヲ以テ勇敢篤実推シテ知ルベシ、

慈感シテ不言壯心革リ、
義辞シテ永訣ヲ衰病痊ユ

添田弥左衛門利信少*ニシテ弱年馬御ヲ好ミ、依藤ニ就テ頗ル常ヲ失フ、又鼓

ヲウツ事ヲ好テ法ニ過ギ、且女色ニ溺ル、事アリ、先考ノ女兄ハ、利信ノ母ナリ、天性氣概アリテ器量男子ニマサレリ、常ニ子ノ不肖ヲ憂テ言ニ出サス、只先考ニ向テ弥左衛門ハアノ通ニテヨイカトアル事シバクナリ、先考心憂テ又言ニ出ス事ナシ、心中常ニ正ニ復ラン事ヲ祈請スル事切ナリ、此誠意感シタルカ、一日利信忽然トシテ自ラ悔、母ト舅トニ已往ノ罪戾ヲ謝シ、愛妻ヲ逐ヒ、悪友ヲ絶テ志ヲ立ツ、於是先考泉津平坂ノ段ヲ講シ、反復克己ノ法ヲ示ス事深切ナリ、利信天性義二勇ム処アリ先考ノ教導ニヨツテ終学ニ志シ、小扶持ヨリ二百石マテ給ルニ至ル、御用人役ヲ命セラル偏ニ先考ノ徳ニ頼ル、此事利信毎々既賛歎シテ先考ヲ仰ク事人ニ過キ終身父以事之、○忠音公大坂ニテ先考ヲ公用人ニ命セラル、重晴翁老病危殆ノ告到小浜ニアリ*年八十六

ル、先考若州ニ帰シ事ヲ願フ時ニ、日光御社参ノ事アリ、公用多キカ故ニ許^レス、此時御懇^命ノ御意^命、先考ヨリ浜名兼克翁ヘオクルル、一書アリ、家蔵ス、其略如左、

看病御暇相願候処、御意莊右衛門相願候段無^レ事ニ 思召、願之通被仰付度候得共、日光御留守中御用多病人有之而ハ、御手支ニ候、至極氣之毒ニ 思召候得共、此節ハ難被遣 思召候、浜名武兵衛廿三日大坂ヘ発足ノ積ニ候得共、莊右衛門罷越候迄、差延ヘ遣シ候、左候得ハ看病モ明^キ不申旨被 仰出、殊之外氣之毒ニ 思召御思案之上、右之通ニ候由冥加至極ニ奉存候、此上ハ親父様私ヘ御逢被成度ト不被思召 殿様御馬先ヘ罷出候而相詰罷有候ト可被思召候、加様ノ思召ノ上ハ決シテ御別条御坐アルマシク候、追付罷下リ拝願可仕段仰上ラレ下サルベク候^云、

尋テ重晴翁病痊又 御意ノ上兼克翁先考ノ家族ヲヒキキテ大坂ニ至ラル、兼克翁時ニ大目付ナリ、

熊^一関^ノ蘊^蓄熟^シ五^一歳^ニ

鹿^一郡^ノ治^教向^ニ七^一年^ニ

大坂ヨリ帰りテ熊河ノ町奉行ニ転セラル、此処ハ江州堺目ノ守リニテ関アリ、山中ツネニ官事スクナク、同僚学友ノ交リモナク、只書見ヲ事トシ、山谷^ノ閑^居、五年ニオヨブ、自謂、ラク天此閑^ノ静ノ地ニ居ラシメテ此学ヲナスナリト、詩ヲ作り和歌ヲ吟シ情ヲヤル、在勤中強齋先生ノ凶計イタル、先考悲涙法ニスギ神ヲ祭テ歎^一哭

ス、余七歳ワカチモナキ幼^ナ心ニモ観感ニタヘザル事ナリキ、○^{在事五年}転シテ角鹿ノ奉行トナル、角鹿ハ北国ノ湊ニテ近^ニ国ノ都^ニ会^{ナリ}、治教ノ職、任モ格別ナリ、コ、ニ勤^勞七年ナリ、

熊河十景ノ詩白鬚ノ社ニ奉納ス、又一年天下飢饉ノ事アリ、熊河大底二百家許リ平生荷物ヲ上方ヘ致スヲ業トス、此年飢饉ニ会^テ中困窮ス、先考粥ヲ煮テ窮民ヲスクヒ、戸々ニメグリテ飢渴ヲ問、其疲勞ヲ察スル事至レリ、角鹿^又ニウツリテ熊河火災アリ、全村大方焼亡スルヲ聞、大ニ驚キ下^リ地困窮ノ村^ニ、馱此末ライカガスルヤト悼^ミ嘆^シ事ヤマズ、幼ナ心ニ不^レ審ニ思ヒシ事ナリ、又熊河ヲ同^ニ心松見才治カ奸佞ヲ寛宥シ宮河平内ガ眼疾ヲイタワルノルイアリ、小事ナレハ略ス、

寛^寛治^治吏^吏革^革狡^狡偽^偽
公^公明^明断^断訟^訟敷^敷昭^昭宣^宣

角鹿奉行ニ属シテ同心ニ組アリ、或其権ニヨリテ民庶ヲ威シ財用ヲ私スル類往々アレドモ、時ノ奉行制スル事モナカリシカ、従^レ来湊中ノ患ナリ、先考其弊風ヲ糺サント、同官名和某ニハカル、名和云、同心ハ与^子ニテ群^下ノ民庶ヨリ親シ、遽^ガニ改^シントセハ、組子難義ノ事出来ラント、先考云、其元アヤマレリ、今マデノ者頭ノ任ハ組子ヲ愛撫シ 国家事アル寸ハ生死ヲ共ニシテ御用ニ立ツガ職分ナリ、○^{先考角鹿同官始ハ嶺尾三右衛門也、後名和莊大夫御先手者頭ヨリ角鹿奉行ニ命セラル}町奉行ノ同心ハ支配^下ヲ治メシメンガ為^ノ組子ナリ、其組子ノ為ニ支配^下ノ患^ル事アランニ、打捨^テオクベキ

道理ナシト、コ、ニオイテ小頭増田半左衛門ニ令シテ云、相組ノ者従来町方ニテ金銀ヲカリ頼母子ヲタノミ、檀権ヲナシ馳走ヲウケタル事多カルベシ、従来ノ事ヲ不包不掩有体ニ書記シ、人別印封シテ出スベシ、相与タガイニ相談スル事アルベカラズ、只自己オボヘアルナリヲ真直ニ書記スベシトナリ、半左衛門氣概アル者ナリシガ、且驚キ且歎キテ宥免ヲネガフ、先考云、了簡違ナリ、所存アリテ云、出ス、多言スル事アルベカラズ、モシイサ、カモ覆ヒカクス処アラバ、其者ノ為ニアシカルベシ、キハメテアリヤフニ申聞ケベシ、支配下ノ難義ヲ奉行トシテ見ノカスベキヤ、此道理ヲ勘弁スベシトナリ、半左衛門理ニ伏シ相組ノ者ニ云、組中股栗ス、不_レ得_レ止事数日ノ内半左衛門ヲ併セテ十六通人別ニ印封シテ出ス、先考云、ヨクコソ書付シタレト称シテ半左衛門カ見ルマヘニテ一々ニ披キ見テ云、此以後カヤフノ事スベカラズ、是尋常容易ノ事ニアラス、猶改ル事ナクンバ、咎必其身ニ及バン、カヘス_レヨク心得ヨ、以往ノ事ハ是ギリナルゾ、心ニカクル事ナカレ、惣々安堵イタスベシトテ、即時半左衛門ガ見ルマヘニテ十六通ヲ火中ス、半左衛門涙ヲナガシ組中ニ伝ヘ云、組中大ニ欣大ニ懼レ、其令ニ感服シテ、コレヨリ威権ヲ振事ヤム、○角鹿ノ問屋何某ガ下筋ノ客何某問屋津屋伝三郎ト云カ、又角鹿ノ問屋津屋伝三郎ト云カ、無_レ覺束_レ角鹿宿ノ問屋ヲ相手取り訴ル事アリ、角鹿ハ御城下ヲ離レ隔リタル処ユヘ、其任重ク死罪以上ハ小浜へ窺ヒ、死罪ナラザル以下ハ不_レ及_レ伺ホ

ドノ場所ニテ郷方ヲカネ頭取テツトムル任ナリ、他国関係ノ公事モ毎度ナルニ、コレマデノ例ニヨレバ、タトヘバ五分々々ノ道理モ角鹿ニ一分ノ理ヲ私シテ四分六分ト裁_レ判スル事旧例ノ如クナリ、相手方モ其心得ニテ訟ルナルベシ、同_レ役嶺尾某ハ先輩ナリ、例ヲ引テ角鹿ノ方ニ一分ノ利ヲ私セント云、先考云、タトヒ先例ナルニモセヨ、分明ノ道理ヲ曲ケ私スル事アルベカラズ、且他所カ、リ合ノ公事、私シテ此方ニ利ヲツクルトキハ、客先_レ心ヲ失ヒ湊全体ノ為ニナルベカラズ、義理ヨリモ利害ヨリモ公平ノ裁_レ判ナルベキ事ナリ、コ、ニ私ナキトキハ、客先ヨリ国政ノ私ナキヲ称シ、氣遣ヒノナキ処ヨリオノズカラ入_レ船モ多カルベシ、自_レ国他_レ国出入ノ裁_レ判直クニ御領分全体ノ目ノ付ク処ナラズヤ、不_レ輕処アリトナリ、嶺尾其道_レ理ニ服ス、コ、ニオイテ従_レ来ノ弊風ヲ革メ正_レ路直_レ道ノ裁_レ判ニ帰ス、衆公_レ共ノ理ニ服ス、角鹿ノ町奉行ハ郷方ノ事モスベ頭取ル任ナリ、従_レ来町方郷方オノツカラ各々ノ義_レ論アリテ不_レ和_レ順_レ、不_レ和_レ順_レヨリ自然_レ二違_レ論モオコリヤスシ、コレヨリ町奉行御代官常ニ不平ヲ懷クニイタル、先考是双方ノ下_レ吏私意アリテ言、或_レ実ニスギ、上_レ役モ亦キ、アヤマル処ヨリ如此ナル事ヲシリ、郷方ノ下_レ吏野瀬兵太夫・垣本宥右衛門ヲ呼_レ論スニ、道理ヲ以シ、如_レ此互_レ二意_レ地ヲ立ツル寸ハ、双方支_レ配下ノ為ニナラザル道理ヲ解説ス、二人服ス、帰リテ同僚上_レ役ニ達ス、コ、ニオイテ日頃ノ留意忽チ解_レ事ヲ

議スルニ蓋ヒ包_ム処ナク、庶_レ事_一和ス、又今立_・南_・条ノ_二郡道
 遠ク、小浜_・角鹿ヲ_離レ_レ収_・納_ノシカタ中ヲ得ズ、ヤ、モスレバ上_・
 ニ費ス処アリ、下_モニ難_・義_ノユヘアリテ上下ノ情不_レ相_・和_一、米ヲ
 納メントスレハ、運_・送遠ク、石_・代金_・納_ニ令セントスレバ、越前
 甚_レ価_・賤_シク、大津_・小濱_ノ米_・価_ニ下ル事多シ、故_ニ從_・來違_・却
 多シ、御代_・官楠_・文右衛門_此ヲ憂テ、先_・考_ニ謀ル、先_・考_・条_・理_ヲ尽
 シテ示ス、楠_ヨクソノ道_・理_ニ服シ、終_ニ石_・代_ニ法_ヲ立_テ金_・納_ニ
 事_・定ル、コレヨリ上_・下_・処_ヲ得、上_ニ費ス処ナク、下_ニ憂ル事モナ
 ク、永ク其法_ニ帰ス、又疋_・田_・村_・筋馬_・借_ノ公事アリ、郷方_ノ係リ
 ユヘ、石原七右衛門_・近藤猪平_次馬_・借_・双_・方_ヲヨビ出_{シテ}対_・決_・推_・
 問セントスレドモ、多勢_・声々_ニ喧_ク思ヒ_ノニ_・訴_テ条_・理_ヲカタズ、
 石原_・近藤_モテアツカフテ、*スベテ事_不容易_時ハ奉行_ニ達_シ推_・問_ヲ請_フ、*例_ニマカセテ奉行
二人_ヲ白_・洲_ヘ入_レテ、其方_トモハ公事_ノ道_・理_ヲ聞_正シ、*明_ニシテ裁_・判_ヲ求_ル
二達_ス、*シタメ_ニ出_{タル}ヤ_ワメ_キノ、シラ又_・相_・互_ニ叫_・言_・タ_メニ出_{タル}ヤ、*明_白ノ定_テ裁_・判_ヲネ_カフルナルヘ
 シ、サアラバ此方_ヨリ尋_・問_フ時_・其_者バカリ答_フベシ、我_レカチニ
 喚_・言_リカマビスシク嘩_・言_{シテ}ハ道_・理_ヲモキ、ツケ難_シ、コノユヘ
 ニ先_・此_事ヲ論_スナリ、又申_・サント思_フ理_・屈_モアルベシ、ソレハ人々
 十_・分_ニ言_スベシ、カマエテ尋_・問_ハザル内_ニヤカマシク言_ベカラ
 ズ、コ、ニ背_カバ外_ヘ出_スベキゾト、*白_洲ノ屹_ト令_{シテ}、サテ次_・第_ヲ追
 テ推_・問_ス、馬_士ノサカシキナラワシニテ一人_答ヘオハラザルニ、又
 一人_云ヒ出_ス、其_・言_ハモオハラヌニ、追_・々_ニ嘩_・言_ス、先_・考_・問_事ヲ

ヤメテ、下_・吏_ニ命_ジ、ソノ問_ハザルニ喧_・言_セシ者_ヲ引_出サシム、*指_{シテ}白_洲ノ外_ヘ
 又問_ヘハ猶_初メノ如_シ、又捕_ヘテ外_ヘ出_ス、如_レ是_・スル事_三度_バ
 カリ数人_ヲ外_ヘ引_キ出_ス、其_・嘩_・言_セシ者_ハ、此_・公_・事_ノ骨_{ナル}ユヘ、
 ノコル者_ハ力_ナク唯_・顔_ヲ見_合スノミ、先_・考_云、此_上ニモ嘩_・言_セバ、
 皆_如レ是_{ナル}ヘシ、ヨク心得_ヨ、汝_等ガ訴_ノスジヲヨク弁_・別_セン
 者_ハ外_ヘ出_シタル者_共ナルベシ、追_・々_ニ出_サレバ、誰_ノコリテ道
 理_ヲ明_サンヤ、令_ニシタカフテ静_ニセバ、*開条_・理_ハオノズカラワカル
 ベキニト、コ、ニオイテ衆_・畏_・服_{シテ}唯_今ノゴト_クセンヲ請_フ、サ
 アラバ出_ダセシ者_ヲ入_レヨ、カマヒスシ喧_クバ、又初_ノコト_クナラント、コレ
 ヨリ庭_中肅_然トシテ問_ニ答_ヘ、尋_ニ応_ズル声_バカリナリ、双方_ヲ問
 イ、終_テ又_・双_・方_ヘ不_・審_ヲカケ、其_・是_・非_ヲ推_・問_シ道_・理_ニノコル処_{アラ}
 バ、一人_ツ、出_テ言_ベシト令_ス、サシヅヲウケテ後、其事_ノ道_・理
 ヲ云_{モノ}アレドモ、其_者ノ声_バカリニテ声_々ニ_・言_ル事_{ヤム}、一席_ニ
 シテ条_・理_分レ、理_非分_明ニシテ双方_違論_{スル}事_{ナシ}、同列_ヲ初_メ
 ミナ服_ス、先_・考_・条_・理_ヲ追_ヒ、事_情道_・理_ヲツクス事_多ク、此_タグイ
 ナリ、後_・年_先考_常云、公_・事_ハキ、ヤスク吟_・味_ハトギガタシ、
 公_・事_ハ道_・理_ノカクレン事_ヲオソルユヘ、訟_ル者_只言_ハン事_ヲネガフ、
 吟_・味_ハ事_ノアラハレン事_ヲ恐_ルユヘ、唯_・閉_・口_・黙_・止_ヲ利_トス、故_ニ
 公_・事_ハ明_ナラザレバ聞_キガタク、吟_・味_ハ愚_ナラザレバアラハレガタ
 シ、然_ルニ公_・事_ノ六_カシキモノ終_ニ吟_・味_ニナルモノナリトナリ、又
 何_レノ村_・邑_カ一人_ノ幼_・年_{十四_・五_・歳_・名_モ村_モワスレタリ}ナラハシアシキユヘカ、小_・盗

ヲナシヨカラヌ事ヲ好ム、親族又ハ村ノ父老ノ戒ヲ守ラズ、村中モテアツコフテ訟フ、先考ヨビ出シテ推問ス、訟ル処ニチガイナシ、汝年ユカヌ身ニテ如是ノ次第不届ナリトテ、手錠ヲ打タサシム、下吏前後ニマワリテ手錠ヲウツニイタリテ、此兇ワツト泣キ出ス、其様子ヲツクク見テ、其父老ニ向テ云、此者不届ナル事ハマコトニ不届ナリ、シカルニ其幼心未事情ニ達スルコトアタハズ、唯手錠ヲオソル、ノミ、不便ノ事ナリ、汝等心ヲツクシテ教示サバ、并々ノ人ニ生立マジキモノニモアラズ、カヤフノ者ヲ見立ルガ村長サノ任ナラズヤト、父老服ス、連レテ村ヘカヘリ二度訟ル事ナシ、人并ニナリシトナリ、又組同心ニ白鹿洞揭示ヲウツサシメテコレヲ講習ス下吏義理ニ向フ心アリ

〔本文余白追筆〕
 「二向フ心アリ角鹿奉在番スル官員奉行二人代官二人大目付一人ノミ、外ニ士人ナキカユヘニ同心常ニ商家ニオソレラレテ威福ヲハル事多シ、タトヘハ小浜ノ足輕同心ヘ私ト云同列ニ対自稱シテ私ト云、角鹿ノ同心ハ自称シテ予ト云カコトク、上役己カ頭人ノ奉行等ヘモ自尊大不恭ニ見ユル事、従来ノ風俗ナラハシナリ、先考異ナルモナカリシガ同心ノ風俗不恭稍礼ニ向フ処アリ」

⊕又タマク閑暇ノトキ小頭増田半左衛門ト将基ヲサス、大底敵手ナリ、互ニ浮底ナク勝負ヲ争フ、朋友相戯ル情ノ如シ、サシ終ハレバ、常ノ如ク狎レ犯ス処ナシ、先考物ニ役セサル事スベテ

〔本文余白追筆〕
 「□又湊中ニ警女・座頭湊中ニ吉事凶事アレハ、其家ヘイタリテ布施ヲ請フ、米銭多カラザレハ或喧嘩狼藉ナリ、盲人ノ事ナレハ湊中争フ事モナク大様ニ銀錢施物ヲ与フ、不争ヲヨキ事ニシ

テ段々ニツキ上リ狼藉次第ニ増長ス、小浜ニ山崎檢校アリテ敦角鹿ニ來ル事アリ、先考召之テ右不法ノ事ヲ伸ヘ穩便ナラン事ヲ論ス、檢校イダケ高二ナリテ盲人ナニヲ以テ渡世スヘキヤ、相応ノ布施物ハ請ウチノ事ナリトニテ、是私ノ義ニテアラス、公義押睛テノ事ナリトテ少モ不肯其様ニ甚不礼ナリ、先考モサコソラン、盲人ノ作法ト、檢校トシテノ挨拶相違モアルマシ、近キ比当町ニ産婦アリテ猶血道ノオサマラサルニ処座頭共來リ、カマスシク施物ヲ請、相当ノ取扱ニオヨヘトモ不承知、喧シク唾言スルニイタリテ産婦血上リテ相果タリ、是モ亦公法△△ナルヘヤシ然ルニ、其地ヲ支配シテ盲人ノ為ニ妻女死スルヲ、其儘ニモスコシカタク、カクハ申、ナリ此次第明白ニ相違シテ官法ニ任スヘシトアル、檢校ニワカニ驚キ惶レ其事ヲ披露アリテハ一向ニ相濟真平タニナリテ相詫ル、コ、ニオイテサアラハ初二云シコトヲ当地ノ盲人共ニ得ト申含向後不法アルヘカラス此事其方受合ニオイテハ幸ニ未表立事ナレハ穩便ニ沙汰スベシ、重テ不法ノ事アラハイツマテモ此事実ヲ以テ沙汰スベキソト嚴重ニ譴責ス、湊中此後盲人ノ不法止ム不日施物ヲ請フ不法止ム○又小浜ノ昆布屋天目屋九郎兵衛⊕角鹿ニ來テ獻上ノ昆布ヲ選、松前問屋ヨリ昆布ヲ出サセ選圖事數日ニシテ不果、頗怠慢ス、先考問屋ノ難義ヲハカリテ天目屋ヲ譴責ス、天目屋恐レテ不日ニシテ事終ル、又湊中宗門改判形ノ時男女多集ルヲ以テ湊中ハカリテ常産ノ利害ヲ論議ス、凡テ群下ヲ愛シ思フ事多コレニイシ「一年」▲末二出ツ▲角鹿ヘ令セテカナハ課役アリ、小浜ニ召シテ奉之、帰路能河ノ方見ヤリテ又詠歌ナリ支配下ヲ傷ムヨリナルヘシ

すミウしと何いとひけんやまの松のあらしはしつけかりしを」

火愚冥々薨族々
 民居族々安火害ニ
 神威堂々道連綿

角鹿ニ火災フセギノ定法ナシ、故ニ失火スル事アレバ、無一面目ニ人多ク、聚リムラガリ中バハ見物スルバカリナリ、或ハ此騒キニ乗シテ小盗ヲナス事モアリ、スベテ防火防二統紀ナシ、先考角鹿ノ大工仲間ヲ火消役ニ定ム、大工仲間相寄テ謂フ、風下ノ家ヲ除ヒ棟ヲ引ヲトシテ、大火ニナラサルヤフニスル事ハ、我々ガ任ナリト悦ビハゲム、鍛治仲間云、大工ヲ火消ニ立ラル、ハキコヘタリ、併

平生
ナカラ常ニ火ワザニナレテアレバ、火ヲフセグ事ハ、我々モ其任ナル
ベキカト云ヲ聞テ、鍛冶モ亦火消役ニ定ム、鍛冶悦デ裂^{サキオリ}織ヲ水ニヒ
タシ、頭ヨリ被フリテ、^{粉火ノ落来ルヲオソレス、烈}猛火ヲ防ク、大工・鍛冶相議テ失火有
レバ、早く駈集リ、其町ノ前後ヲ階子ニテ立チキリ、ワケナキ人ノ
入ル事ヲユルサズ、ユヘニ火事場最モ閑ニナリ、従容トシテ火ヲ防ク、
自ラ統紀アリ、条理アリ、無用ノ人ヲ入レザルユヘ、家財ノ紛失スル
事ナシ、肅然トシテ火ヲ防クニ便アリ、タマ／＼失火スル事アリテモ、
更ニ隣家ヲ焼ク事ナシ、又火所改ト云法ヲ定ム、平生一月ニ一度
ヅ、肝煎五人組立合テ、互ニ火ノアルイロリ・巨燧・茶場竈ヲ
ハジメトシコト／＼ク改テ損スル処アレバ、相互ニ戒テ即時ニ修復
ス、^{此火所改ハ熊河ニ、又アル時ヨリハジム}又不時流言ナドアレバ、月番門前二夜々箱ヲ
出シテ烏散ニ思者アレバ、誰ニテモ訴ヘシム、^{又アキナイ}商売改メノ法ヲ定テ其
渡世ニナラカスル、何ノ産ニヨリテ、家内ヲ養フニ足ルカイナヤノ
大概ヲ点檢ス、カヤフニセンサク密ナレバ、^{不好人}ヨカラヌモノ足ヲトム
ル事アタワズ、家々又互ニ警シテ博奕ナドスル事ナシ、役ニアル事
七年、湊中安堵セシクライナリ、○角鹿氣比宮ハ北国ノ大社ニテ上
古ヨリオトロヘタリト云ヘドモ、猶社家モ数人アリ、然リト云ヘド
モ、志アル者モナキユヘカ、不文ニテ神道モフツ、カナリ、先考強
齋先生山本氏ニウケタル神道ヲ解説シ、経学ヲ講習セシム、社家皆
門人トナリテ、日々ニ來テ書ヲヨミ、道ヲキク、平松・河端ナド
日夜励ミカメ、社中自ラ風ヲナス、又氣比宮ニ蔵書ノ法ヲ立テ、先考

自卷頭ニ蔵書ス、尋デ民庶オモヒ／＼ニ書ヲ奉納ス、蔵書スルモ
ノハ、文庫ノ書何ニテモ神借スル事ヲユルス、奉納セサル者ハ、
神借ヲユルサズ、コ、ニオイテ遠近争テ蔵書ス、コレハ角鹿ノ湊学
^{者ナリ}ニヨルモノ寡キヲナゲキ、義理ニヨラシメンヲネガヘドモ、湊ニ書籍
スクナク、タマ／＼学ニ志アルモノモ書ノ不自由ナルヨリ黙止事多
キヲ憂テナリ、数年ノ間経傳ノルイハ云ニ不^{通鑑}及、綱目ヲ初メ史伝
ノルイ大部ノ書モ追々ニ納ルユヘニ、志アレバ書ニカクル処ナシ、
社人学ニ志シ、神道モ開ケシユヘカ、神威日々ニ増シ、信仰モ多
クナリ、正一位^{勲一等}太神宮ノ額ヲ賜リ、遂年テ社頭ノ繁昌云バカリナシ、
越前国角鹿氣比宮蔵書トシルス八角ノ朱印ハ先考ノ自書ニシテ、安田
定平彫刻スル処ナリ、先考社頭ニ心ヲ尽ス事ヲ感セラレテ、聖蓮^書
院宮ヨリ六所玉河ノ式紙ヲ玉ハル、○^{本文余自追筆}右何レノ年カ歳旦ノ詠歌ナリ氣比宮
ニ奉納ス△△氷にこる身ハそれなからあらたまのはるの日かけにとけすやハあらん
中情ノ祈請群下服シ
不顯誠心四方伝フ
北国ノ売船大坂ヘスグノリヲオボヘテ、往古ヨリハ角鹿ノ入船甚少
シ、此湊ハ入船ノ多寡ニヨリテ、盛衰ヲナス処ナルニ、次第ニオト
ロヘン事ヲ憂ヒ、此上ニ非常ノ火災ナドアリテハ、全体ノオトロヘニ
モナルベキヤトキズカヒ、前ニ云、火消ノ法ナドヲ定メ、猶氣比宮ニ
祈請シテ湊中火災ノ難ナカラシメン事ヲ心願ス、^{是等ノ}其至誠群下ヘモ
ヒ、キタルカ、相伝ヘテ悦服シ今ノ御奉行ハ下ノ難義ヲキヅカハレ、

夜々自身町中ヲ廻ラレ、非常ノ怠リナキヤフニ戒ラル、辱キ事ト流
 言スルニイタル、○如此苦勞ヲ積メトモ、此ヲ術フ心ナク、誰レ知
 ルベキ事ニアラザレドモ、其地ニテ云伝ル処カクノコトクナレバ、自
 ラ四方ヘモ伝ヘタル事モアリト見ヘテ、余數十年ノ後大津ヘイタ
 ル、大津ノ医生関澤治棋ヲ好ム、暇日余ト対局ス、數日ノ後又
 相交ル事アリ、潭治云、ドナタカト存シタレバ、昔日越前敦賀ニテ
 善政ヲ施サレシ山口莊右衛門殿ノ御子息ナルヨシ承リタリト云、先
 考ノ名他邦ヘモ及ビタリト見ヘタリ、

新論^{シテ}国^ニ本^ヲ無^シ廻^レ避^ク

英^ノ断^令人^ノ心^ヲ辣^然上^ラ

角鹿ヨリ小浜御用人ニ転シ財用ヲ司ル、 忠存公御晩年ナリ、于レ時
 財用ノ費ス処収納ノ高二過、国用年々ニ不足ス、先考量入為
 出ノ教二法トナリテ全体ヲ平均シ考ルニ、今ノ分ニテ押移ラハ、
 數年ノ間イカントモスベキヤフナキニイタルヲハカリ其要御借物ヲ
 断ハリテ、利息ヲ出ス費ヲ省クニアリ、以テ国家ノ基本ヲ立ント、
 同僚ニ議ス、同僚不^レ肯、執政者ニハカル、又不^レ聽、スベテ謂、
 ラク、是マデノ通りニ仕送ラハ、尚數年恙ナカルベシトナリ、先
 考往昔ヲ詳ニシ、後年ヲ推シ、収納ヲ本ニシテ仕方ノ多寡ヲ計リ、
 御納戸ノ全体ヲアキラメク、リテ、同僚上官ニ解説スル事綿密^{ナリ}
 道理明白ニシテ得失掌ヲ指スゴトシ、衆終ニ其議ニ服シ、 忠存
 公ニ同シ事ヲハカリテ、先考ヲ推ス、時ニ 忠存公御大病ナリ、先

考速^カニ江戸ニ下リテ同官執政ニ議ル、亦同意ス、コ、ニオイテ御
 病床ニ召レ不^レ得止^ル事^ヲノ理勢ヲ詳ニ言^ハ上^ス、伺ノ通り御借物
 暫ク可^レ断^ルノ旨命セラル、且其任ヲ先考ニ令セラレ、恩賜アリ、
 先考道ヲ急ヒテ小浜ニカヘル、帰路三遠ノ間ニテ御凶討ノ早追香
 川六郎左衛門アトヨリイタルニ会フ、ハジメ右御借物断リノ一件
 衆議ト異ニシテ、且 御家ニコレマデナキ事ナレバ、執政以下服
 スル者ナシ、千艱シテコ、ニイタル、国家ヲ憂ルノ心切ニシテ、
 一毫功^ノ名ニ心ナク、純乎タル忠誠記録ニ存シテ明ナリ、後年余
 其座ニ入りテ御用座ノ日記ヲ見ル、先考辛勞ノ時ノ事ナレバ、
 余ガ心ノ向ヒヤフモクハシキユヘカ、此前後ノ録數十年ノ今日ニ
 ビ、キアマリニハゲシキ勢ニテ、不^レ覺心辣^然タリ、同ジヤフナル経
 歴ユヘ此^レヲ今日ニクラベ考ルニ、先考ノ忠勇カケハシ、テモ及
 ビガタク、半分ニモユキタ、ズ、恐レ入りタルバカリナリ、タトヘ
 バ義理ト見定メナバ、フルイ^ク腹モキルベク一本^ノ槍モ打コムベ
 ケレドモ、此昔日ノ時勢ヲ見ルニ力^トメテモリキンデモ、先考ノ十
 分^ノニモ及^バベカラズ、何々ノケ^ノ条ト云事ハナケレドモ、右日記
 ノ書中ニ純一無^ニノ魂アラハ^ル、コトニ其比ノ記録ハ非^ニ番ニテ
 記シタル事ト見ユルニ、猛火ノ烈々タル如ク大波ノ打アクル如ク、
 髮^ノ毛^ノシマルゴトク覺ヘテ一^ノ座寒^ク風ヲ生^{スト}モ云ベシ、真ニ興ガ
 ル忠^ノ肝ナリ、

入^レ神^ニ廟^ニ算^三軍^調ヒ

握レ機ヲ籌シ策八・陣堅シ

先考弱冠ヨリ孫武カ兵学ヲ愛ス、嘗テ佐久間立齋ニ山鹿流ノ伝ヲウケ、立齋孫子新註ヲ著ス、又諸家ノ説ヲアゲテ孫子集ナ註アリ、集註モ新註モ先考心ニ満タズ、又徂徠ガ国辭解ヲ見テ旨ヲ失フ、多キヲ知リ晩年マテ取惱マレテ、諸家ノ説ヲ相シ手ニシテ、孫子考一帙成ル、今家藏ス、又八陣図説ニトリ惱シバノ説アリ、マヘニ記ス京・大坂・大津御借物御断ノ一挙根本ヲ固シ、諸方ノ手ヲ齊シ事一齊ナラザレバ功ナリガタク、大事廢セン事ヲハカリ、上御一人ノ賢慮ヨリ執政同僚下小役ニイタルマデ、心一ツニ出ル如クナラザレバ、却テ国家ノ害トナラント、心ヲ尽ス事大方ナラズ、京留守居竹岡弥五兵衛ヲ軋シテ新二大目付ヨリ竹岡伝兵衛ヲ命セラレ、大津御倉奉行藤野伝右衛門・向井佐五左衛門ヲ軋シテ下中御代官ヨリ片岡次部野右衛門ヲ命セラレ、大津八定番ヲ一人トシ、加番一人ツ、古法ノ如ク勤番ス、举措スベテ先考ノ廟算ニ出ルト見ヘタリ、竹岡・片岡京大津ニテテノ挙動二人ニカハリテ興ガル事多シ、スベテ先考ト謀ヲ合セ心ヲ一ニシテ大事ヲ成立セント一途ニ思ヒコミタル様ニ、後年思ヒ合ス事多シ、是等ノ処ニテ先考辛勞スル処不尋常ヲ可レ見也、當画シ終テ其身ハ勘定人堀口義太夫ヲ連レテ上方ニ出、數十人ノ者ニ応接ス、其跡ヲ見レバ、戦陣ニハアラネドモ、彼モ一家一身ノ栄枯進退ノ関ル処ニテ組合タル小割ヲ云ヘバ、人数モ不レ少前約ニ違テ借タル物ヲ不レ復ルハ本ヨリ、此方ノ不レ恭ナリ、其不レ恭ヲトガムルハ、彼方ノ道理也、此際ニ命ガケノ相手モアル道理ナリ、義アリ人情アリ納得スル処アリ、敵対スル処アリ、彼我ヲ知リ得失ヲ明ニシ己ヲ脩ル事嚴齋ナラザレバ、成功ハナリガタシ、上官ニハカリ、同僚ニ約シ、本未始終不レ動不レ挫ノ節制ユキト、

キタル事ト思ヒ合ス事多シ、比スベキニハアラネドモ、戎陣整齋号令明・肅會無纖毫姑息之意武侯ノ陣ニ似タル処アリ、

先考人ヲ見ル処、余人ニ異ナル事アリ、加藤彦五郎ハ新左衛門実子ナリ、当世メカズ寡黙ニテ律義二見ヘタリ、糟谷彦進云、倅助九郎外ニ友ダツモノモナシ、彦五郎ハ倅同年ニテ十六歳ナリ、律義二見ヘ隣家ナレハ出会スナリト云、先考云、然ルベカラズ、彦五郎終リヨクセマジ、眼中不レ善処アリトナリ、彦進父子トモ此言ヲ信ゼス、余亦不レ審ニ思シナリ、彦五郎廿四歳ノ年大坂ニテ呉服屋ノ物ヲ欺キ盗シテ出奔ス、又鈴木虎藏ヲ見テ云、此者役ニ立ツマジ、恐クハ終リヨクセマジトナリ、余云、虎藏八年モワカシ、読書ナド精出シ愚鈍ニモナシ、ナニトテサハ仰セラル、ゾト問ウ、先考云、サレバ書モヨミテ今サシアタリ先ツヨキ若キ者ノコトシ、見ヨ、終リヨクセマジ、眼外面ニ着タリトナリ、余甚タ不レ服、数年ノ内ニ虎藏出奔ス、此余類スル事間々アリ、右二人ハワケテ人々不レ審ニオモヒシ事ナリ、右竹岡・片岡ナド全ク其任ニカナフタル事トオモヒ合ス事アリ、類ニ因テ附ス、

十千ノ傲言折ケ孤忠ニ
 十萬ノ黄金定ニ一鞭ニ
 江戸竹原文右衛門ハ始メ小浜町同心ナリ、不レ念アリテ扶持ニハナレ、艱難ヲ經テ一分限者トナリ、前年御用ヲ達セン事ヲ願ヒ忠音公御代ヨリ往々金子ヲ出ス、息ヲ重ヌルノユエンカ、一万兩

ニ及フ、竹原元ヨリ氣慨アリ、万両ノ証文ヲ差上ケ生國ノ恩ニ報ユト云、其功ノ不^少カ^ラヨリ会^積法ニ過キタルユヘカ、其功ニ誇リテシバ^く失^レ礼ノ言アリ 忠存公御城ニテ御能アリ、竹原来リ合スニヨリテ拝見ヲユルサル、御家中ヘハ一統ニ石飯煮染ナドヲ玉ハル、数日ノ後、竹原^{御用人}座^ノ中ニヲイテ、兩膝^{マクリ}ヲ掌ニテタ、キツ、サマ^くニ傲^言シ、御能拜見ハアリガタシ、然レドモ、給ベ物ナド^ハ未ナリ、スベテ御会^積一^万兩サシアゲタル功ニアタラズト云ニイタリテ、マコトニ傍^若無人ナリ、彼レ氣ハ^アアリテ且其功モ不^レ少ユヘ一^座頗ル憚リテトリアハズ、竹原咎ル者ナキヲ知り、膝ヲタ、イテ、マス^く無^レ礼ナリ、先考竹原ニ向テ云、其方器量アリテ金銀^{前年}ニ富金子ソコバクヲサシ上ケタル事先^達テキ、御上御逼^迫ノ中先^以奇特ノ志ナリト感^心セシナリ、今謂^フニ存^シヨラズ、卑^劣ニテ其^素性モオモハルト也、竹原怒テナニノ卑^劣ナル事カアルト云ヒ、又^{ソレ}ニ付テ傲^言ス、先考從^容トシテ云、心ヲシズメテ聞ベシ、知^テノ^通リフツ、カノ御納戸ナレドモ、猶十^万石ナリ、豈竹原^一人ニ御能ノ時料^理ヲフルマフ事ヲ難シトセンヤ、ノゾミナラバ、三^汁九^菜ニテモ七^五三^二ニテモ望ニマカスベシ、御能^其ノ時其評^議モアリツレドモ、他ノ町人ト事カハリ、志モ奇^特ノ竹原ナリ、飾リタル馳走ハキハメテ竹原心ニカナフマジ、唯真^実ノトリアツカイ可^レ然^ト、不肖ナレドモ用人ドモ役^座ニヲイテ相伴^シ、カケ合ノ仕度ヲ出ス、是尋常ノ事ニアラズ、他ノ町人ノ及ビガタキ処ナリ、然レバ礼義ヲ存

タランニハ、此会^積ハソコバクノ金銀ニモカヘガタキ御^懇志ト祝^著モアルベキニ尾^陋ニ食ヒ物ノ結^構ヲコノマルルヤ、其心^根ヲシラザルハ我^々ガ不^念ナリ、望^ナラハ、振^舞ベシ、サテモ^く素^性マデモ思ハレテ存^外ニ賤^シ、トタ、ミカケテ弁^ズレバ、竹原^一言^ノ下^二語^一塞^リ慚^オソ^レレテ赤^面スレドモ云直スベキ言モナク、閉^口汗^顔スルノミ、コレヨリ傲^言ヤ、止^ミテ、先考ノ前ニテハ無^レ礼ノ言ヲ出^ス事ナシ、一^微事サ、イノ事ナレドモ、其跋^扈ヲクタクキ我マ、ヲナサシメザル事ニオイテ係^ル処少カラズ、○竹原ハ江^戸方ナリ、江^戸方ヲ除ケテ上^方ノ御借^物大^数九^万五^千金余也、抑^人ノ物ヲカリテ約^ヲ變^ズルハ不^信ナリ、不^義ナリ、然ルニ 國家ノ興^廢ヨリイヘバ、小^信小^義ヲ見^ルルベキ時ニアラズ、シバラク忍^デ大^義ヲ立^テ、重^テ前^約ノ如クスルガ相^對シテ、量^ヲサ^ダメハ闕^クル処アルベカラズ、先考平^生ノ戲^言ニ金ヲ人ニ貸^シテ、利ヲ以テ渡^世ヲナスモノ、其元^利ヲ全^セバ、天^下ハ富^家ノ有^トナラン、彼スデ二年^々ノ息^子ヲトリテ、或ハ元^物ノ高ヨリ多^シ、其上ヲ猶イツマデモ元^利共^ニ全^セセント云ハ貪^ルナリトノ事ナリ、コレラノ処ヨリ平均^見テ訣^然トシテ御借^物ヲ斷^リ 御^家中興^ノ根^元ヲ固^スルノ議ヲ立^テラレタルナルベシ、然ルニ彼^モ亦^一命^ニカヘタル位ノ金銀ナレバ、容^易ニハ肯^フベカラズ、一^タビ口^外シテアトモドリシテハ、國^本ノクスレニモナルベケレバ、一^死ヲ以テ万^金ニ宛^ルニアラズンバ、事ナルベカラズ、但十^万ニ未^レ滿^金子ノ為^ニ一^命ヲ捨^ルルハ惜

ムベキカナト思ヒ定メタルトナリ、此根本ノ訣、定ヨリ衆ノ口多議モ
 不_レ日_ニ一_ニ致シ東_上西_上一_ノ轍ニ出ル如クニサタマリタル事ト見ヘ
 タリ、今按ルニ先考初テ御用座ニ入ラレタルハ元文四年ノ冬ナリ、
 忠存公御在城ナリ、翌年五月御參府後御留主ユヘ月番宅勤ア
 リ、此宅勤ノ時勘定人金岩安右衛門・岡野郷右衛門・堀口義太
 夫ニ御納戸出納ノ大数ヲ討論シ、今年大事ヲ定メザレバ、ソコ
 バクノ国用ヲ失ヒ御為アシキ事ヲハカリ、初テ同僚ニ議シ執政ニ
 ハカリ、マヘニ記ス通り若州一_ニ致シテ江戸ニ下リ、忠存公ニ直ニ
 伺ヒ御直ニ命ヲ蒙ラレタルハ、同年八月ノ初旬中旬ノ内ト見ヘタリ、
 忠存公ノ御逝去ハ八月廿二日ナリ、忠用公御忌明後上方ニ出テ
 先君ノ遺命ヲノベテ金主へ此議ヲ云ヒサトシ、京・大坂・大津ヲ
 経ラレタルハ、同年十一月ヨリ十一月ノ初ナリ、中間纔ニ四五ヶ月
 ノ間ニ上_下東_西自_他内_外其議決シ、ソノ事成ル、謂フニ先考一_ノ
 死ヲ宛テ十_一万_一金_一ノ為ニ捨ル_一決_{ナク}ンバ、唯金主ノ承引セザル
 ノミニアラズ、内外如_レ此ノ半_一加行クベカラズ、今日是ヲ思_惟スル_計
 ニナルベキ事トモ思ハレズ、猶不当ニ思ハル、位ナリ、傷_レ国_ヲ愛_レ
 君ノ誠心一_一已_レヲ見ルニイトマナキ処ヲ知ルベシ、子孫コ、二眼ヲ
 ツケ忽カセニ仰クベカラズ、
 決_{スル}疑_ヲ大_ニ觴_ニ客_ニ感_シ義_ニ
 被_レ垢_ス児_ヲ服_人称_ス真_ヲ

先考御借物対談ノ任ヲウケテ大坂ニイタリ高津杜丹屋ガ座敷

*金主數十人ヲ

ニ金主數十人_ヲ会シ 忠存公ノ遺命ヲ宣ベテ元金息子共ニ勝手取直
 スマデ暫ノ間相断_ルノ旨ヲ談ズ、京・大津・大坂トモ撰_レ新古ヲ、不_レ拘_ヲ、
 親疎、一_ニ統_ニ申シ談ス、辞命スベテ同ジ、
 其客ノ上座ハ惣年寄ナルユヘ薩摩屋仁兵衛ト云者ナリ、先考〇、
 遣_命ヲ伝_ヘオハル、衆愕然トシテ未_レ口ヲヒラカズ、先考
 大觴ヲアゲ酒盛テ一_一杯ヲ傾_フケ、主人ノ遺命ト云ヒ国家安危ノ
 カ、ル処、此一_一盃ニアリ、ネガハクハ仁兵衛ウケテ故備後殿泉下ノ
 心事ヲ快_クスベシ、仁兵衛ススンデ云_フ、先剋ノ御意ノオモムキ逐
 一_一承_レ知仕_リ奉_レ畏少_モ違_レ論_{アル}事ナシト、座中ヲカヘリ見テ大觴
 ヲウケイタ_バイテ一_一盃ヲ傾_ク、一_一席ノ金主仁兵衛ニ同ジテミナ命
 ノマ、ニセント肯_テ多_ク言_{アル}事ナシ、先考大ニ悦_テ主客相和シ酒
 一_一盃相_レ交_リ大_ニ燕_ニ會_ニ置_酒ノゴトシ、一_一席ニシテ事成ル、京都ハ三
 一_一条ノ館へ招カレタルカ其処ヲシラズ、大津ハ石場稲屋ト云茶屋
 ノ座敷ニ会ス、大底大坂杜丹屋ニ会スルゴトシ、スベテ一_一席ニ
 シテ事_一定_リ、違_言スル者ナク、三_一都會_ニミナ承服ス、独_リ京都ノ町人
 松_屋長_次上_者重_ト
テネカイタル事アレ、
 ドモツイニ落_レ去_ス 此一_一挙 御家コレマデナキ事ニテ他家ニハ類スル
 事モアレドモ、如_レ此手_一際_{ナル}処_一置_{ツイ}ニナシト外ニテモ感称ス、
 此時細野四郎兵衛_{後_庄ト云}ハ久シキ御出入ニテ、先考大津ノ旅宿ナリ、
 本ヨリ金主一人ニテ、稲屋ガ会スンデ家ニカヘリ、先考ニ酒飯ヲ
 ス、メツ、云_フ、サテモ_一口_一惜_キ事ト存ル、子細ハナニトテ武家
 ニハ生_レ出_ザリシ事ゾ、今日ノ御席上先_ニ殿_ニ様_ニ御_ニ遺_命トハ申ナガラ、
 仰セキケラレタルオモムキハ前約ニタガフテ、スツヘリト御無理
 ナリ、此御談ヲ承ル者トモハ、何レモ難_レ義_ニ存_ゼヌ者モナクスツ

ヘリト道理ナリ、十分ノ道理ヲ持ナガラ十分我マ、至極御無
 理ノ御受ヲ仕ル*畏奉ノミナラズ、御料理マデ下サレアリガタキト云ハネ
 バラバヌ事、体ユヘ何レモ其心ニナリ、承服シテ退キタリ、帰路ツ
 ラ〳〵存こころ候ニ、サリトテハ口惜キ事カナト存ツ、宅ニカヘリ、セ
 メテト存テカヤフニ申上グルナリト云テ大哭ス、〇コレヨリマヘ金
 主若州ニ来ル事アリ名ヲワスル、北、役人ヲ廻勤スル時、先考ノ門
 内ニ小児ノアソビ居ルアリサマヲ見ル辰藏三八雲、此者謂ヘラク御勝
 手ヲスベテ当時ノキリ人ナルニ、*リト見ユ、然シテ其子ノ衣服破裂汗垢見グルシキ
 風情云バカリナシ、徒人ナラズト、後先考上京ノ時、此者此
 事ヲ云出し、一事ノ上、国ニ私ナキ事ヲ知ルニタル、此度ノ一、拳
 ナニト云事ハナクテ、ミナ其令ニ服ス事不こころ思議ナリ、昔日ニ思ヒ
 合セタリト云、

先考性質素節儉ニヤスンジ、カリニモ蕭美僭上ノ事ヲコノマズ、
 本ヨリ代々清貧ニテ年々家財衣食事ヲ欠ク、御用人ニ命ゼラ
 レテハ、日夜タ官公事ニ心ヲツクシテ家ヲ思フ事マレナリ、性
 稟ノ質朴ナル上ニ先根岸氏妣亦厚道ニシテ風流ヲコノマズ、外面ヲ
 カザル心ナク且小児モ多ク家政マズ〳〵不如意ナリ、大底引
 人ノ横山与太夫ニ任シテ不疑称スル人モアルシナリ、其比余十
 五六歳衣服ナドノ不自由ニハ人ニコヘテ困窮スル事モ多カリ
 シ、〇大坂・京・大津ノ御用スミテ帰路道中木戸ニ宿ス、夜
 二入テヤヤ必死ノ覚悟語モ解ケ生キテ帰ル事ハアルマジト思ヒシニ

不こ思議ニモ故郷ヘ帰ル事カナト、ハジメテユルム心アリ、ヤレ
イテ大ニ提擲シ不調中法至極ナリ、其尾ノ慎ココナルニ猶ナラ塚ヘモ入ラザルニ此
 怠慢ハ何事ゾト大ニ戒心セシナリト、後年シバ〳〵物ガタリア
 リ、

独憂ヒテ国本ヲ功未タ半ハ
ニ誰称国士俸自全オ
キ事ヲ

〔本文余白追筆〕
*先考里民ノ辛苦ヲアハレミ、ワキテ大飯郡佐分利谷・下中郡名田荘谷猪鹿ノ害多キヲ以テ此二筋
 ヲ先巡郷ス、丹波国ハ鉄炮ノ禁令ユルヤカニテ下民嚴シク制スルユヘ、猪鹿多ク若州ニ来ルアリト
 見ユ、又伐出スニ便アシキユヘ右二谷ノ奥ニハ巨木梢ヲ交ヘテ甚生ヒシゲリ、雪中カヘツテ猪鹿シノ
 キヤスキユヘモアルヤト事情山中ノ△△里民ニ問ツクヲ以テ猪鹿ノ害不容易事ヲ□同列ニ告、詳ニ言上
 圖シ在中貸鉄炮ノ法ヲ沙汰ス、コ、ニオイテ里民猪鹿ヲ狩ルニ便ヲ得テ患ヲ除ク事最多ク、老年ノ者
 ハ今ニタマ〳〵其徳ヲ称スル者アリ、其余国本農ニアルユヘヲ以テ先考心ヲ用ル事多シ、上中郡・三
 方郡ハ未及巡郷内ニ退役ナリ〇〕

*〇甫シメ忠用公財用儉約ノ惣司ヲ酒井伊織*殿・小林衛盛ト先考トニ命ゼラル、

先考自謂ラク、堯舜ノ治毛国用足ザルトキハナニヲ以テ仁政*シキヲホド
コシ窮民ヲスクウベキト国ノ費用ヲ省ヒテ根本ヲ固センヲ希ヒ、衆
官ト図議シ節儉ヲ事トシ、江戸ニ往來ス純ハラニ国家ノ為ヲハカ
 リテ織毫不顧身ヲ費ヲハブクノケ条枚ノ挙スベカラズ、其姑息ノ意
 ナキ処ヨリ小人ハ聚歛刻剥ノゴトク云ナシ、大人ハ其成功ヲ疾ミ
 猜ミオノツカラ群議ヲオコル、先考コレヲ知ルトイヘドモ、聊顧慮疑
 念ナシ、江戸往來ノ記行ノ巻頭ニ口「蜂にさされおろちにのまれいつ
 か我君にさ、げん品物のひれ、其巻軸に「はちのひれおろちのひれをと
 りそへて君にさ、ぐるけふのうれしさ、先考此際ニオイテ心ヲツクシ

思ヲ碎ク、其辛勞ハカリガタシ、此記行ノ二詠ニテ見ルベシ、是ニ
是ニオイテ国家ノ財年々ニ増益シ 御天守ヘ納ル処、金五千兩、京
 都ノ館金蔵ヲ新ニ建テ、若干金ヲ納レ、江府ノ御賄金約月ヨリ二二三
 月前ゴトニ数千兩ヲ下致シテ、尚大津御納戸ニ数千兩ヲ貯フ、江
 府ヘ早く金子ヲ下スユヘ、諸、私当金前金ニナシ、費ヲ省ク事多シ、
 コレホドニハイタレドモ、先考猶根本ノ未固ヲヲナゲク、延享三年
 寅正月十一日御家中本知ニ命セラル、モノハ、実ニ先考ノ力ナリ、然
 シテ先考世ト俯仰スル事ナク、義理ト見テハ纖毫身廻避スヲ顧ル事ナキユ
 へ、功ヲ猜ミ寵ヲ妬ミ讒問モアリシニヤ、同月十五日転シテ社倉ノ惣
 司ヲ命セラル、惜ムベキノ機会ナリ、

愛君不式ナラ涙潜々

忘身ヲ特立立氣氣翻々

先考天性ノ忠誠人ノ不_レ及_レ処アリ、位ニアルトキモ出テ外ヲツトメ
 ラル、寸モ言コトハ 国家君上ノ事ニオヨベバ、慷慨シテ落涙シバく
 ナリ、御用座ヲ退カレザルマヘ讒間奸佞ニアヤマラル、聞ヘアリテ、
 粗其実ヲ知ルトイヘドモ、特立ノ氣奪フベカラス、シバく蹶テマ
 スく奮ト云ベシ、晩年余ヲ誡メラレテ不_レ欲_セ知_レ謀_ラ欲_ス忠誠ヲ
 云ヒ、又勿_レ驕勿_レ欺ノ遺誡、先考ノ骨髓ニ出ツ、余若年ヨリ其言
 行常ニムコフ処ノ本心ヲ窺フニ、真二人ニ異ナル事アリ、 忠音公
 御逝去ハ享保廿年ナリ、御凶訃ノ事老中ヨリノ書中早朝敦賀ノ
 役宅ニ達ス、其時ノ愁傷涕泣タトヘンカタナシ、余時二十歳側

ニアリテ感心ス、又 忠存公御逝去ハ元文五年ナリ、江戸ヨリ帰
 リテ糟谷彦進翁ニ対シ殘念ノ事ヲ云テ、クリカヘシノテノ悲哀云
 シカタナシ、余時二十五歳、又 忠用公或国事ニ御心ノ向フ処、未
 二十分事ヲ歎キ、又国事ニ御心ヲツクサル、事ヲ感シテ慷慨シテ
 ノ数言憤涙、又 忠与公ノ時浜町ノ御類火ヲキイテ愕然トシテ起
 病状且驚且歎カレタル風情、又 忠貫公御志ヲ立ラレタル風声
 ヲ聞テ、策ツエヲ以テ地ヲ打天、地ヲ礼、拜アリタル様子ナド思ヒ合セバ、
 歴々ノ賢大夫モ愧ル処モアリヌベシ、○一旦伊藤仁斎ガ門流ノ学
 生中村彦六ナル者若州ニ召出サレ、程朱ノ学ハ時ニアハズ、甚タ忌
 マレタルノ勢ニテ、是ニツキテハ様々ノ曲節言ハニモノベガタシ、
 猶程朱ノ学ヲ唱ヘナバ偽学ノ禁モ出カネマジキホトノ時、躰ナルニ、
 先考聊憚ル処ナク、高々ト論説アリ、其コロイカナル事カ書生モ
 数十輩来会スレバ、街道ヘモヒギワタルホドノ大声ニテ経書ノ
 講釈オコタラス、伊嵩ナド、コレハノト申合ヒタル事モアリ、コ
 レホドノ時、勢ナレドモ、*願慮畏憚ノ気色ナク少モオソル、処ナク、其頃ノ詠歌ニ「ふる
 ゆきに駒なつむとも玉銚の道より外の道は求めじ、スベテ 国家ヲ
 憂フルノ誠、心倦々惻怛ノ至情ヨリ出テ凡慮ヲ以テ窺ヒヤスカラス、
 五代ノ勞苦老不_レ衰ハ

一、心倦極欲レ対レ天ニ

先考ノ家督ヲ続ハ正徳元年 忠音公御代ナリ、此御代京加番、表
 取次、公用人、熊河町奉行 忠存公御代角鹿町奉行ヨリ小浜御用

人 忠用公御代御用人、社倉惣奉行ヨリ大坂御先御用ヲ命ゼラレ、公
 用方御勝手方ノ事共ニアハセテ可勤ヨシ、江戸へ召シテ命ゼラレ、
 直ニ先達テ大坂へ出テ、公用方御勝手方ノ事トモ御着坂マデ待
 設ノ事ヲ司ル、尋テ公用人ニ命ゼラレ大坂ニテ隱居五十七歳
 忠与公御代進講ヲ命ゼラレ御居間ニテ大字ヲ聞セラル、忠貫公御
 代老衰ヲ辞シテ 忠用公ノ召ニ応ゼス、 忠貫公一小字・近思録
 ノ師説ヲ奉リ御頭巾ヲ玉ハル、 忠与公・忠貫公御兩代隱居閑散
 ノ身ナレトモ、常ニ国ヲ傷ムノ心ヤム事ナク、凜乎タル忠誠位ニア
 ル人ノ如シ、生涯ノ志ツトメ求ルトハナケレトモ、唯天ニ対シテ不
 愧ヲ期スル者ノゴトシ、明和七年御納戸御逼迫ニツイテ余御用座歸
 役ノ命ヲウク、 国家ノ危難云ハンカタナシ、八年卯春余先考ノ
 大病ヲステ、江戸ニ下ル、竹原以下ノ四町人ニ対談シテ御勝手
 ノ基本立チ、モハヤ氣ツカイナキニ定リテ道ヲ急テ小浜ニカヘル、
 三月五日ナリ、先考恙ナシト云ヘドモ、享年八十老病ツカレツ
 ヲク危キ事旦夕ニアリ、同七日夜病勢ヤ、甘テ精神健ナリ、余悦
 テ近ク侍シ 国家ノ御危難四町人請合テ安堵ス、偏ニ 忠貫公
 篤実ノ御徳ニヨル事ヲ演説ス、先考烟管ヲ以テ席ヲ打テ、感歎數
 回且欣且泣コレ正心健ナル、終ニテコレヨリダンダン衰へ、九
 日夜半御終去也、実ニ忠誠死シテ後止ムト云ベシ、
 浪華ノ講議永ヲ顯シ君
 若耶ノ道義永ヲ世宣

先考一代ノ事業ノ中後世へヒギ大ナルモノニ件ヲアゲテ一編
 ラムスブ、一ニハ 忠用公大坂ノ時町奉行方ヨリ御城東手井路堀
 割リノ事ヲ伺ル、悪水ヲヌキ、新田ヲ開キ御益多ク從テ百姓毛作
 徳ノ利アルニヨリ、數十村相カタラフテノ願ヒナリ、初メ堀田相模
 守様御城代ノ時ニオコリ、次ニ酒井雅楽頭様ヲ經、江戸窺モスミ、
 阿部伊勢守様御城代ノ時取カ、ラントスルニイタリテ、伊勢守様御退
 役ナリ、故ニ新御城代へモ一応ハ達シテコソ歛ハジメスベシトテ、
 シバラク扣へオカレタル大事トナリ、此間曲節アルベシ、外様ノ
 知ルベキニアラズ、大底ハ御城東手ネコマ川・鯉江川ナド、テ河
 州ノ西撰州ノ東川筋多シ、衆水北西へ下リテ淀川ニ会ス、淀川
 筋土砂流シテ川トコ高クナリ、河州ノ水ハキ塞カリ、悪水コミ水ト
 ナリ田所ノツカヘニナル事多シ、故ニ御城ノ東ヨリ小川ヲ堀リ、悪
 水ヲコ、ニ落シ南流シテ天王寺辺へ落サントス、如此ナラハ、公
 義ノ御益モ不レ少ノツモリヲ以テ近郷數十村願タルノヨシナリ、
 堀田侯以來御城代違存ナク、ステニ関東伺モスミタル処ナリ、忠
 用公御巡見アリ、此新川筋ヲモ御一覽アリ、新井路出來ラバ、
 悪水モヌケ田所ノ為ニハ小分ノ御益モアルベケレドモ、御城要
 害ノ為ニハ不可也、大坂城東手衆水多ク大沼足入アルガユヘニ、
 平地ナレドモ後口堅固ノ要害ナルニ、悪水ヌケ田畑トナリ、且
 新川ノ兩岸船ヲヒク人ノ往來ナキアタハズ、自ラ道筋ツクベシ、
 大和川其始ハ京橋へ流レ下リテ第一ノ要害ナルニ御一統後ホ

ドスギテ住吉ノ南へ落シ、大和川筋ハ平地ニナリヌ、夫レサへ嘆息ニタヘザル事ナルニ、又新ニ沼地ノ水ヲヌクトキハ、東手ハ平野トナラン、御城代トシテ要害ニ害アル事ヲ黙止ベキ事ニアラズトテ、相模守様・雅楽頭様へ御自書ニテ達セラルル此御書先考ニ命ゼラレテ先考書之、御自書トシテ江戸へ、此両侯ハ先達テ御城代ニテ即此事ニモ関ラルル、且御由緒ナルヲ以テナリ、忠用公ノ此義論マコトニ至当ノ道理ユヘ、御老*服セラレタルト見ヘテ中モオス事ナラズ、一往ニシテ此新川議止ム、後年松平右京大夫様公用人大野矢八京都ニテ鹿野休左衛門ニ公用ニテ対談ス、矢八御家ノ事ヲ称シ、御兩代御城代ニテ一度ヅ、御名譽アリ、一ハ忠音公*大坂大火ノ時御用米ヲ出シテ町中ヲスクハレ、御老中連札ノ御称美アリ、一ハ忠用公御老中伺ノスマタル新井路イデヲヤメラル、此二件容易ノ事ニアラズ、御城代ノ留書ニテ承知仕リタリ、他ノ御家ニナキ事ナリトテ、感称ス、ト鹿野追テ物語ス御老中伺スマタル事ト云ヒ、堀田・酒井ノ兩侯ハ其事ニモ関リ即今ハ御老中ナリ、ソコヘムケテ義論ヲ立テラレ、其論至当ニテ此議一往ニテ止ミタル事ハ、思ヘバ尋常ノ事ニアラズ、凡天下ノ大事カヤフノ小事ヨリ成敗ス、殊ニ此御城ハ江城ト倚角ヲナシ天無双ノ要地ユヘ、御城築ノ初ヨリ御備格別ナリ、其第一ノ後堅固平野ノ如クニナル寸ハ城築ノ御主意空クナリ、東照宮ノ神慮マデ恐入タル大事ナリ、昇平ノ久シキユヘ少分ノ卑猥ニツシリ、此心付ナカリシハ、堀田・酒井ノ兩侯モ職分ヲ忘レタリト責ラルトモ辞ナカルベシ、事既ニ決

シタルヲ御一存ヲ以テヤメラレタルハマコトニ奇代ノ大事也、他家ニテ格別ノ事ト評判スルモ、コトハリナリ、然ルニ其始、忠用公御巡見ノ寸、先考駕ニシタガフテ一巡シ、御要害ノ不利ニ目ヲツケ、其道理ヲ明弁シテ新川ノ議止ラルベキカノ議ヲ献ス、*是尋常ノ事ニアラズ忠用公言下ニ其言ヲ容レテ、天下ニ忠シ留書ニカキシルシテ御城代ノ眼目ヲ万世ニノコサレ、タルハ御忠誠ノ至リナリ、其直言ヲ容レラレタルハ、人君ノ大徳ニテ実ニ奇代ノホマレナリ、*御名譽○若州ノ経学ハ忠勝公ノ時田中好庵耕庵・田中一学ガ名アリ、其後宮川仁右衛門・田中源之進・松田善三郎ナド人ノ知ル処ナリ、近ク田中十蔵ニイタルマデミナ皆朱学トハ唱ヘナガラ、或林家ノ学ニ近ク、或博覽強記ノルイニテ道義全体ニ力アル学トハキコヘズ、未熟ナル事ト見ヘタリ、本ヨリ山崎先生ノ門ニ出ルニアラズ、(浅見)綱齋(若林)・強齋兩先生ノ伝ヲ得テ程朱本実ノ学、若州ニ入り来リタルハヒトヘニ先考望楠ニ学テコレヲシキノベラレタルダニ基ス事マヘニ、詳ニス、此レ一場一時ノ事ニアラズ、時イタリ大道此端ヨリヒラケバ、大ニ国俗全体ニモアヅカルベシ、*其正説此二件先考事業ノ大ナルモノト云ベシ、子孫華榮非一朝一夕ニ子孫ノ華榮非一朝一夕ニ謹唱積善余慶篇謹唱積善余慶篇文言伝積善之家必有二余慶云々、非一朝一夕之故、其所由来者漸矣ト、今日如此榮福ヲ蒙ル事外ニ其イハレナシ、蓋先考傷国、愛君家ヲ忘レ身ヲ不顧忠誠ノ報今日ニ来ルモノナリ、可

仰^レ可^ク歎^ス可^ク畏^ク敬^ク慕^ク奮^ク竦^ク心更^ラニヤスカラズ、慷慨ニタヘズ、
一篇ヲ述テ子孫ニノコシ永ク忘レザラン事ヲ希^フ而已、

余外ニ師トタノム方モナク、幼年ヨリ先考ヲ嚴師トモ神明トモ仰崇
ス、先考余ヲ愛スル事人ニコヘ、教訓スル処唯忠孝仁義ノミ、動ケ
バ 国家ノ事ヲ説キ、感慨シテ落涙シバ^ノナリ、今此篇ヲ述ルニ
イタリテ、昔日眼中ニアリ、其左右ニ侍スル如ク、其言容ニ接スル
如ク、旧懐感慨云ハンカタナシ、不孝不恭ニシテ慈愛懇惻ノ情ニ背
キ 国ニ忠ナル事アタハズ、訓ニ報ル事アタハズ、然シテ此温飽ヲ
キワメ華榮ヲ辱ス何ノ顔アリテ地下先考ニ見ヘンヤ、実ニ不世ノ罪
人ナリ、如此書ツラヌルモ人ガマシク無用ナリト思ヘトモ、此榮福
ハ先考ノナス処ナリト思フ心黙止ガタク、且先考事業ノ片端ヲモ子
孫知ラザラン事歎カシク、恐入タル事ナレトモ、一篇ヲ作ス事右ノ
如シ、然ルニ世遠ク事隔リ、且其辭モ拙シテ其事跡^ノ解^ケガタキヲ
ハカリテ、又カク記^抄シオクモノナリ、子孫此心ヲ察シテ其德ヲ仰ク
ベシ、又カヤフニツヅリタレバトテ人ニ銜フ事アラハ、神靈ニカナ
フマジ、且我家ノ事ナレバ、カタク他人ニ示スベカラズ、范文正公
ノ大賢ヲ以テ尚恨ル処アリトノ事ナリ、況不肖不孝ノ身昔日ヲ追懷
シテ云処ヲシラズ、

天明八年戊申晩夏

小子重遠謹述